

Sea Times

5
APR 2003



総合研究棟 1号館

記事

表紙・目次.....	1	アフガニスタンより女性教育者20人来学.....	5
お茶の水女子大学の行方 いまだ道遠し 男女共同参画.....	2	アフガニスタン指導的女子教育者の様子.....	5
生活科学部近況.....	2	研究室紹介	
総合研究棟一号館が完成.....	4	理学部物理学科ソフトマター構造研究室.....	6
		いずみ保育所の今・編集後記.....	8

お茶の水女子大学の行方 いまだ道遠し 男女共同参画

本田 和子 学長

男女共同参画社会基本法の制定は、女性たちの前にも、当然の権利としての社会参画を保障し他方向への可能性に道を開いた。その意味では、関係者たちの永年の努力を讃えるに吝かではない。しかし、国立大学協会の調査の示すところ、国立大学における女性教官の割合は、いまだ、一〇パーセントに満たない。二〇パーセントを越えているのは、僅かに本学と奈良女子大学の二校に過ぎないとは。

これに対しては、女性教官不足の要因として、公募の際に優秀な女性候補者が少ないことを理由に上げる向きがある。つまり、特別に差別しているわけではないが、「選考の対象となる候補者の少なさ」が原因だとするのである。しかし、学部学生の男女比を見るなら、特定の学部は別として、一般に女子学生の在籍率が上昇の一途を辿っていることは瞭然である。しかも、彼女たちの中から大学院に進学し、研究者への道を志す人たちの数も必ずしも少ないとは言えないのだ。彼女たちは、概して勤勉な努力家であり、後期課程を終えたときの学位請求論文にも優れたものが多く、研究者の資質能力に関して、巷間に云々されるような特段の性差は見いだせないというところらしい。

とすれば、国立大学が女性教官採用に消極的な原因はどこにあるというのだろうか。つまり、女性候補者がいるにもかかわらず、彼



本田学長

女たちが採用されにくいのは、一体、何に由来するのだろうか。その最大の原因として、教官集団の「意識改革」の遅れが指摘されている。たとえば、女性はハードな実験等に不適切とする研究者観、あるいは、女性は慎重すぎて創造的・先端的な研究に向かないとする女性観、等々。どうやら、女性研究者に仮託されるイメージは、いまだ、旧態を脱し切れていないらしい。

さて、ならば、私たちは、ここで声を上げねばならない。「それだから、女子大学が必要なのだ」と。研究者採択の不均衡に関して、仮に、女性候補者の少なさが要因ならば、「女性」を特化して研究者を育てる機関が必要である。ハードな実験環境が女性に不都合なら、女子大学は、よりよい環境設定を工夫する実験場所として存在せねばならない。そして、その実験結果は、男性研究者にとってもプラスの研究環境であると証明して見せる必要がある。また、

創造的・先端的な研究が女性に不都合と見られているなら、そうした俗説の可否を確かめる場としても女子大の存在意義は小さくない。私どもの国は、既に男女共同参画社会基本法を設定し、それを承認し推進することを言明している。それを真に実現しようとするなら、先に上げたように、女性の相応しい用い方に関して、あるいは、男女間の均衡・不均衡に関して、それらの是非を確かめるべく実験の場が必要となる。とすれば、いま、女子大学の存在意義は、以前にましてより確かなものになりつつあると言つて出てもいい。

生活科学部近況

生活科学部長 本間 清一



生活科学部 本間清一 生活科学部 本間清一 生活科学部 本間清一

総合研究棟一号館が出来上がった。八階建てである。ここには生活科学部の理系・実験系である生活環境

学科三講座と生活環境研究センターの研究室が移り住む。生活科学部本館は昭和七年竣工した。震災への備えから床や壁も殊更厚く出来ており、

水道管を通す為に床下のコンクリートに穴を開ける作業を請け負った工事人は何れも手間で賃に全く合わない分厚さだと文句を言った。しかし、多量のエネルギーを消費し、機器や設備を時代の変化に合わせて絶えず更新する理系の研究が本館の建物をこれ以上痛め付けることはできなくなっていた。良い時に研究棟が建ったと思う。

研究棟の実験室が多様な用途に対応できる様、壁の仕切りが変更でき、人の通る時のみ廊下・階段を照明し、水道・排水・電気・情報系統は保守がし易いよう配管スペースに纏められている。空調は冷房・暖房ともガスを使い、必要な時に部屋毎に冷暖の空気が吹き出す事になるらしい。研究棟のエネルギー消費を抑制し、システムの維持を優先した設

計である。建物の住人の更なる省エネの努力が問われる。その努力が配分研究費の増加となって戻って来ることを期待したい。

生活科学部本館には生活科学部文系の人間生活学科に所属する発達臨床心理学講座・生活社会科学講座・生活文化化学講座の研究室と生活科学部の授業の為の教室・演習室などのスペースになる。これらの三講座の研究対象は人間にまつわるもので広い。人の生涯にわたる発達の在り方、心の問題がある。更に、子ども、家族、高齢者、女性、消費者などの具体的な人間像の生活に根ざした課題設定やそれらの文化事象としての分析である。それにより生活の質を軸にした「人間共生」の価値を創造しようとする。

COEに採択された誕生から死にいたる人の心の問題を解決する事もテーマの一つである。本学部の前身である家政学部の児童学科では真つ向から「子ども」に関するテーマが研究に取り上げられた。今再び子ども・家族・家庭が問い直されている。平成十五年度から「子ども発達教育研究センター」が、文部科学省が正式に認めた組織として本学で発足する。人間生活学科の教員・学生は同センターの活動を専門領域の延長として捉え、密接な関係をもつて勉強に活用も出来よう。同センターは、附属学校園はもとより地元・社会と広く学外にも接点を持ち、「子ども」を多面的に研究し、実際に起こる問題に対処しようとするものである。

生活科学部の勉強は生活の知恵を科学すること、女性に必要な・便利な新たな産業の立ち

上げや社会的サービスをも提言できる時代になった。

さて、生活科学部本館は相当手を入れないと今後の用途に耐えないので本年夏頃から全館改修が計画されている。改修に際し女高師のよすがを伝える部分の保存には予算額にも拠るが極力配慮がなされよう。正面玄関を境にし東西に二分して、まず西側（理学部側）を本年度に、次いで予算上未定であるが平成十六年度に東側（幼稚園側）の改修工事が予定される。理系の研究室移動により空いた分を利用して、学科の教官はその都度工事をしている側面に研究室を移動させる。三年間に二〜三回の引越しをする教官もあるかも知れない、「評価の時代」にあつてまことにお気の毒である。

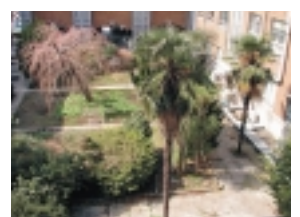
生活科学部本館は本学最古の建物、十分にお役目を果たした年齢である。建物の佇まいを保存する観点から外観を変えずに機能向上を目指した内部の大改修が予定される。手厚く育成された女高師の遺物は何度かの改修で残り少なくなった。階段教室（二〇一室）



階段教室の当時の木製201号室、階段教室の据え上げ式椅子

材できつちりと作られており、四八名の学生と先生が緊張感をもって話ができる空間である。標本を陳列保存した欧米の伝統校によく

見る中二階のギャラリイはもはや無い。微音堂前の左右の廊下は耐震設計で柱が緻密に並ぶので遠近感をつくりだす。長い廊下に見えるが、歩くと近い。



本館西側中庭

微音堂で二分されている中庭は風だまりで、夏は各窓から風が通り抜けて涼しい。床は長時間立ち仕事をしても疲れが少ない材料であるが、今では受験生がびっくりするうぐいす張り、学生には先生がやってくるのを察知できる新機能でもある。

かつて大学の建物毎に宿直当番を置いて、火災や盗難、事故の発生に対処出来る様になっていた時代がある。平成初期迄本学も続いた気がする。本館には古い建物なるが故に、深夜見回りの宿直者を困らせた「おぼけ」の出没が噂される場所（複数）があつた。今度の工事でおぼけも住処を追われるのか、それとも改修で居心地が良くなりもつと出て来るのか、深夜まで居ると私も出て来そうな気がしてしまう。ミステリーも建物の深夜のアクセサリーである。

最後に、本学部から大学院に進学する次の二人の学生さんが留学することになった。田中絵梨（生活工学講座）さんはドイツ学術交流会の奨学金を受けて、空調関係の勉強にドイツの建築物理学研究所へ。田中恵理子（食物科学講座）さんは本学の国際交流制度に基づき実践栄養学の勉強にオーストラリアのモナシユ大学へ行く。帰国時の報告会が楽しみである。

総合研究棟 一号館が完成

お茶の水女子大学 施設課

総合研究棟一号館が完成しました。建設規模は鉄骨鉄筋コンクリート造、地上八階・地下一階、総床面積五六五七㎡で、工期は平成十三年八月から平成十五年三月。既に、関係



工事前の景観（表紙と比較下さい）

給断出来る様に設計致しました。これによって、今迄、修理・増改時には、階や棟毎にライフラインを停止させたり、再度天井配線を敷設するといった作業を行っていましたが、この建物ではその様な煩雑さは激減することでしょう。

外観からも分かるように、一スパン毎の外壁部に、格子網で囲んだ垂直シャフトを屋上面まで設置しており、実験設備等の将来における変更に対応出来る様に、長期使用可能な建物にしています。建物内にあっても廊下の天井を板ではなく、格子網を採用することで天井配線類をシースルーにし、メンテナンス性の向上を図っています。



外壁のシャフトの内部

部局に建物を引き渡しました。

この建物の特色は、実験系に比重を置いた構造で、将来の実験内容の変化に対応する為、電気、ガス、給排水、空調、ドラフトチェンバー排気口を一スパン毎に

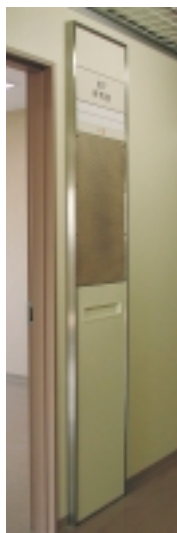


格子天井の実験室

セントレールが印象的な天井になっています。一般の研究室は、天井板を張って冷暖房容積を減らし、投稿口と一体となった標示板を設置、研究室前にはパネルを吊る為の可動フックレールを設置するなど、工夫を凝らしました。

建物色調及び意匠は、学内の施設計画委員

研究室の標示板（上から部屋番号・教員名表札・掲示板・投稿口の配置）上部には廊下の格子網天井、天井際にはフックレールが見える



会をはじめとする会合での検討により、キャンパス景観の統一性維持の観点から、生活科学部本館と同じ高さまで同一色相・同一面状の外壁タイルを使用し、新旧の建物の融合を図ったランドスケープとしています。建物南面には、ベランチ、日時計、パーゴラ屋根を設置し、狭キャンパスにあつて広い空間を取っていますので、学生や



南側広場、ポツンと立つ折れ曲がった鉄柱は日時計

同様に実験系教室の天井も、板を張らずに配管類を剥き出しにする事で、改修や装置の移動などでも、天井配管を調べるのに、いちいち天井板を剥がし直す必要がありません。その為、多くの実験室は天吊式可動電源コンセントレールが印象的な天井になっています。

教職員等の憩いの広場として、活用が期待されます。総合研究棟と図書館との間には、高さ約5mの地盤高低差があり、そこにL型構造コンクリート擁壁を設置することで土留めをしています。



いずれ流水が見られる段々池、右にはパーゴラ屋根群が

この擁壁の基礎を利用して、防災及び災害時の活用水となる防火用水槽（約三六七）を設けました。総合研究棟屋上に降った雨水を利用しており、濾過装置と擁壁の高低差を活かし、流水（循環）させることにより酸素浄化し、水の汚濁防止に利用します。雨水利用では、平成十五年度の生活科学部本館改修工事でも同様に集水して利用する計画です。

その他にも、屋上面積の二〇%を緑化してヒートアイランド防止を心掛けたり、廊下や階段の照明を、人感センサーにより自動消灯させるなど、省エネルギーや環境対策を実施しています。

総合研究棟屋上よりの眺望は、文京区の建物群や、晴れた日には富士山まで見えますので、一度は機会を見て最上階へ上がってみて下さい。



八階から富士山を望む

最後に、工事期間中は、車輛搬入、騒音、仮設道路等に関係各位にはご迷惑をお掛けしたかと思いません、その間の御協力に感謝致します。また、今後本学及び地域の発展に寄与出来る建物等の整備に、施設課技術職員一同は努力してまいりますので、更なる御助言をお願い致します。

アフガニスタンより女性教育者 二〇人來学

二月三日より三月七日までの研修が無事終了

五女子大学コンソーシアム連絡協議会

座長 箕浦 康子



文部科学省の河村副大臣を訪問した研修員一行

アフガニスタンより、教員養成系の二つの大学の女性教官一〇人と女性校長一〇人が研修のため来日しました。二月四日には本理学部会議室で本田学長をお迎えして開講式を行い、小憩の後、本学の館がある教授による講義、近代日本女子教育史からの提言、アフガニスタンの女子教育復興プラン策定にむけて、がありました。昨年八月にはコンソーシアムの関係者八人がカブールに出向き学校現場や教員養成大学などを視察し、十一月には教育大学学長やアフガニスタン教育省の局長などを日本に招き、当研修の準備をしてきました。女性教育者リーダーグループ育成のための今回の研修では、各大学が三ないし四日の研修を引き受けていますが、本学のプログラムは次の通りでした。

二月十・十二日は、日本女子大学で幼稚園・小学校での研修を希望する一〇人と本学で理科教育の講義・実習を希望する一〇人に分かれました。十日は、室伏理学部長による「自然系分野における女性の研究・技術者養成」、



中学生アフガン料理を習う

石井朋子附属高等学校教諭、佐藤道幸附属中学校教諭による「理科教員養成のカリキュラム、理科教育法、教育実習」についての講義、藤枝修子アフガン特任教授による理科実験の基礎である「量る・測る」ことについて実習しました。二月十二日の午前中は藤枝特任教授の指導で、二人一組で「時計反応」の実験を行い、午後は教材作製実習で、ペットボトルを使って実験器具をつくり、塩水振動子の実験をやりました。十七、十八、十九日は、東京女子大学の担当でコンピュータ初歩の講習会、二十日には、また全員がお茶大に集い、午前中は学校運営・年間行事計画などの校長業務について附属学校校長や副校長らと懇談後、理科グループと家庭科グループに分れ、授業参観やチームティーチングのための教室をつくる実習をしました。二十一日は、理科の授業で教壇に立ったり、アフガニスタンにはない家庭科教育のコンセプトや職業教育・保健衛生・栄養学との連携について学び、午後には、前日の教案に基づき本学附属中学生に対しアフガン料理を教えるもらいました。その後、アフガン料理の試食会、畑江研究室手作りの日本料理や中華料理を研修員に味わってもらったこともかねて、お茶大での研修に関わった関係者も交えてさよならパーティーを開きました。

研修員は、二月二十二日から二十七日までは奈良へ行き、世界遺産を見学したり山村の小学校を訪ねたり、奈良女子大学附属小中学校で総合学習についての研修を行いました。今回は、研修補助インターンの学生二人を

各研修に張りつけ、翌朝十時までに研修の様子をwebにアップし、関係者が相互に他所での研修を参照できるようにしました。これは、カブールの留守宅の家族が日本での様子をJICA事務所に聞きに来たときに元気に研修を受けている本人の姿をパソコン上で確認させられるという思わぬ利用がありました。また、桜蔭会や附属学校の保護者会の協力を得て、二月十五日(土)には家庭訪問の機会を持ちました。通訳なしでしたが、研修員には日本の家庭の様子がわかり非常に好評でした。本研修の最終報告書は四月中には発行される予定ですので、ご入用の方は、研究協力室までお申しお越しくください。

アフガニスタン指導的女性教育者の様子

アフガニスタン担当特任教授 藤枝 修子

二月三日から三月七日までの五週間にわたる研修期間のうち、東京女子大主催の情報教育で、タリ語の文書作成を含むコンピュータ実習が行われた三日間を除き、全期間を来日研修員に同行する機会を得ました。ここでは、この間に感じた様子を述べたいと思います。

まず、服装は校長と大学教員とに違いが見られましたが、校長は全員いっつも黒の洋服と白または灰色のスカーフを着用していましたが、大学教員はいろいろな色で、がら物の洋



カフェテリアの説明に聞き入る一行



奈良の100円ショップで買ったお土産と静岡県総合教育センターで買った文房具を持って東京行き新幹線まで待つ一行（掛川駅にて）

年齢、立場などの微妙なものが原因と思われる場面も多々ありました。私は言葉が通じないの
で、通訳や
コーデイナー
からの情報
が、表情

聞いてみました。ラメ入りの洋服は生地を買って仕立て屋でサイズに合わせてつくった
当の三〇ドルだったとか。
年齢構成も校長グループは年配が多く、平均年齢は四五・一歳に対し、教員養成カレッジ（TTC）教員は三一・八歳、教育大学は三八・八歳でした。学歴についての不謹慎な比較が許されるとすれば、校長は大卒四名、TTC卒三名、高校卒三名に対し、TTCと教育大学は全員大卒、修士修了者四名、PhD一名であり、特に教育大学教員はソ連などの外国の大学院修了生が三名おられました。この二〇名の方々は今回の研修ではじめて知合いになった人たちもかなりあるとのこと



お琴の演奏を体験（於・奈良新公会堂）

服と模様のあるスカートをもっとおられました。ラメ入りの美しいロングドレスやブランドもののハンドバッグ、つけ爪など関係する私たちがよりずっとおしゃべりな雰囲気を感じに思い、詳細を

ました。ただ、女性の立場などを議論する場では全員が活発に意見を述べられました。当然ながら、校長グループは常に自分の学校の代表としての意識があり、四名が8mmビデオを来日直後に購入し、帰国後自分の学校で紹介しようとのアイデアで、いろいろな場面の撮影を実行していました。今回のような来日研修に求める目的が、校長と大学教員とはかなり違いがありました。今後の研修に対する希望として、今回のように広い分野がよいという意見と、専門分野ごとの研修を少数で、もっと深く掘り下げて欲しいという意見があり、大学教員には後者の希望が多数を占めました。留学生の受け入れを希望する声もありました。しかし、共通点は、コンピュータの実習が有意義であったこと、日本が空襲などで壊滅した状況や戦後立ち直った経緯を詳細に知りたいとの希望が強かったことでした。研修員の皆さんは、今後のアフガニスタン女子教育のハビリテーションへの役割を実感しながら、物心ともにいろいろなお土産を携えて帰国されました。私たちも、大勢の方々のご協力により一年目の成果としてそれなりのご報告が得られました。この紙面をお借りして、ご支援下さった方々に感謝します。



養護学校生徒が作った小作品を見て感激ひとしおの一行（筑波大学附属桐が丘養護学校にて）

や態度からは察することができました。質疑応答や意見交換の場では、大学関係者からはいくつも活発に発言されましたが、校長グループからは決まった方からの発言が多かったように感じました。

ソフトマターって何？
物理と聞いて皆さんはどのようなイメージを持ちますか？今まで物理学は自然界の現象を、そのエッセンスだけを残して単純化していき、その根本的な原理を明らかにするという手法（還元論）により様々な可能性を人類に示してきました。そのような物理学の流れのなかで、最近では、今までに得た物理学の知識を利用して、我々の身近にある多様な複雑な現象を明らかにしようとする新しい流れが生まれてきました。一つの例を考えてみましょう。私たちの身の回りは様々なモノで満ちあふれています。そのようなモノが硬いモノから柔らかいモノへと変化してきている気がしませんか？例えば今までは金属やセラミックス（陶磁器など）が使われていた容器が高分子（プラスチック等）になったり、テレビがブラウン管から液晶になったりしてきます。これら、高分子・液晶・界面活性剤（石鹸）などの柔らかい物質をまとめてソフトマターと呼びます。このソフトマターが活躍するのは単に工業製品だけではなく、化粧品、食



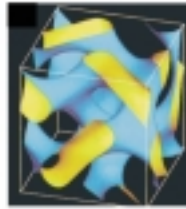
実験中におじゃましました、奥のガラスケース内の装置は小角X線散乱装置

研究室紹介

理学部物理学科ソフトマター構造研究室

理学部 今井正幸 教授

品、医薬品などもすべてソフトマターであり、我々生物もすべてソフトマターで作られているのです。いわば、人類の歴史を、素材を用いて分けるとすると、土器から石器、金属器の時代から今ソフトマターの時代に突入したのです。では、これらソフトマターが物理の分野ではどのように扱われて来たかを考えると、驚いたことに殆ど研究の対象としては扱われて来ませんでした。これは、最初にも書いたように、物理が還元論的な手法をとる為に、高分子・液晶・界面活性剤を代表とするソフトマターがぐちゃぐちゃして（複雑で）、訳の分からないもの（多様な性質）と認識されていた為です。これまで、工業的な要請からも、これらの物質は合成を主体とした化学の分野で研究が進められて来ましたが、時代の流れとしてソフトマターを物理としてしっかりと研究しようとする機運が欧米で盛り上がってきました。そして、今まで培われてきた物理の成果（例えば統計物理学など）を用いると、その複雑で多様な性質をもの見事に説明できることが明らかになって来たのです。そのソフトマター物理の成果を受けて一九九一年に P.G.deGennes 教授がノーベル賞を受賞し、物理におけるソフトマターの地位を確立しました（今年の五月に P.G.deGennes 教授が本学に来校される予定です）。このような欧米での流れに対して、最近ようやく日本でもソフトマター物理が盛り上がってきました。そのような機運の中で、本学物理学科には出口研究室（理論）、今井研究室（実験）、



奥村研究室（理論）とソフトマターの研究室が3つもあり、国内有数のソフトマター研究センターとなっています。

今井研究室ではどのような研究をしているのか？

ソフトマターは何故、柔らかいのでしょうか？例えば高分子は非常に多くの原子が紐状に繋がって出来ていて、更にその高分子が色々な形に集まってその物質を作っているからです。言い替えると、外から高分子に力を加えると、高分子の集まり方や紐の曲がり方を変えて、クッションのよう

にその力を受け止めようとすると（これを大きな内部自由度があると呼びます）からです。ここで、面白いのはソフトマターは力学的な力だけではなく、温度、濃度、電場などの外部環境を少し変えるだけでその形を変えてしまうことです。例えば界面活性剤は親水性の分子と疎水性の分子をくっつけて一つの分子にしたものなので、水のなかでは疎水性の分子は水を避けようと、親水性の分子は水とくっつくこととし、その結果図に示すように様々な形をナノメータースケール（ $1\text{nm} = 10^{-9}\text{m}$ ）で作ります。不思議なことに、外部の温度をほんの少し（例えば 0.1°C ）変えると、最初の形から次の形へと移ってしまいます（構造相転移）。これは、ソフトマターの構造が非常に微妙な（エネルギーとエントロピーの）バランスの上で成り立っている為で、この微妙なバランスがソフトマターのもつ構造の多様性を生み出していると考えられています。

今井研究室ではそのような多様な構造間の相転移の機構を実験的に明らかにしており、例えば膜状の構造がネットワーク状の構造へと転移するときには、図に示すように膜が次第に揺らいできて、隣り合った膜同士が融合していく様子を明らかにしました。

また、種類の異なる幾つかのソフトマターを複合させることによって、一種類のソフトマターでは観察されない新しい構造や性質を明らかにする研究も進めています。例えば、紐状の高分子を界面活性剤でできたナノメートルの大きさをもつ球状の膜の中に閉じ込めることによって、膜や高分子の構造や性質がどのように変わるのかという研究はソフトマターを用いたナノテクノロジーの基本的知識を与えるものです。実際に医薬品を膜の中に安定に閉じ込める方法について製薬企業との共同研究が始まっています。さらに、生体内では高分子と液晶が共存したり、高分子が膜の中に埋め込まれた構造が観察されています。このような構造を人工的に形成し、その構造の特徴や性質を明らかにする研究にも挑戦しています。

このように今井研究室ではソフトマターが示す複雑で多様な構造や性質を様々な実験的手法（中性子・X線・光散乱法や原子間力顕微鏡・共焦点レーザー顕微鏡）によりあぶり出し、全国の共同研究者との議論によりその本質を明らかにしようとしています。



この日の実験室の人達

いずみ保育所の今

子ども発達教育研究センター 松永 聖子

レースのカーテンの向こうに青い空が見える。生活科学部棟のレンガがくつきりと浮かび上がっている。子どもたちのやわらかい寝息と、布団を通して伝わってくるあたたかさ。午後一時過ぎはお昼寝の時間だ。

午前中、保育室内はおままごと、おえかき、ふざけっこ、さまざまな名前のつけきれない遊びの中で、にぎやかなお話の声や笑い声。泣き声であふれていた。お昼ご飯には、いろいろなメニューのいいにおい、食器のふれ合う音。そんなものでいっぱいだった。お昼寝の静けさの中で、小鳥の音が聞こえる静けさの中で、それらのにぎやかさは、保育室の壁や床、畳、テーブルやいす、絵本やおもちゃのひとつひとつにしみ込んでいつているような気がする。



お昼寝の子どもたち

第三号の特集で本田学長が触れていらした学内保育所が、ここ、いずみ保育所である。子育てをしながら本学で学ぶ学生・院生と、勤務する教職員の子育てを支援しようと、二〇〇二年一〇月に附属幼稚園の一室を改修して開所した。対象は、生後六

ヶ月から満三歳未満児で、定員は六名で、保育士三名が保育にあたり、学生を中心としたボランティアにもお手伝い頂いている。保育時間は月（金）の一〇・三〇～一六・三〇で、月極保育のほか時間預かりも行っている。現在の利用者は、大学院生、聴講生、科目履修生、教員のお子さん、〇歳児一名、一歳児四名、二歳児四名、三歳児二名となっている。利用の曜日や時間帯はさまざまである。学内に保育施設がほしいという声はかなり古くからあったというが、具体的に動き出したのは、学内の有志の先生方が集まり、まずは授乳のためのベビールームを作ろうと動き出した一九九九年からのことだそうである。本田学長のリーダーシップで、二〇〇一年にベビールーム開室、二〇〇二年にようやく保育室の開所となった。



午前のお遊び、外からは附属幼稚園の元気な声も

お昼寝から覚めたら何をしよう・・・？午後も、子どもたちには無限大の世界が広がっている。

ドア一枚隔てた附属幼稚園でも、子どもたちが無限に豊かな世界で活動している。生き生きとした話し声、世界の広がりを感じさせている。その新鮮な世界から、さつと風が入るような瞬間がある。おそろのおそろのドアからのぞいて、赤ちゃん来てますか？と聞いていく男の子の声、玄関ホールで泣いている保育所の子どもの涙を、自分のハンカチでそっと拭いていく女の子の目の色などに触れるときだ。今日は、もうお帰りの時間のようだ。



お片付けの後にはみんな揃ってお昼ごはん

子どもたちが午後へのパワーを蓄えている間に、私たちが、半日の保育を振り返って、保育パワーを蓄えることにしよう。

大学の暦（平成十五年四月）

- 四月 九日 大学入学式
- 四月十五日 前学期授業開始
- 学生定期健康診断開始（十八日）
- 七月二〇日 大学見学会

編集後記

厳寒の日々が去り、木々の芽生えのときに、本号をお届けします。前号の発行からまだ日が浅いのですが、現在本学が置かれている状況を反映して、お知らせすべき多彩な話題に事欠きませんでした。本学の行方に関しては、学長からのメッセージを継続的にお届けしています。また、前号でも取り上げたアフガニスタン教育支援に関し、更なる展開があり、二人の方に寄稿して頂きました。さらに、総合研究棟1号館が完成しました。その詳細は施設課からのレポートをお読みください。この建物は、大学院と学部とが一体となつて研究活動を行う拠点として建てられたもので、一号館は生活科学部との関連が深く、同学部の紹介および表紙の写真と併せての小特集です。研究室紹介では、ソフトマターとよばれる物質がテーマです。身近な物質でありながら、その奥深さを探求すれば先端研究に至ります。最後は、活動を始めた保育所の現状紹介です。

小紙は、社会の中の大学、の姿を映し出すというささやかな試みです。ご意見、感想など、お寄せください。

（編集長 柴田）

本誌に関するご意見・ご要望、記事の掲載などは、企画広報室にお寄せください。

お茶の水女子大学広報誌 Tea Times
平成15年4月15日発行
編集発行/お茶の水女子大学広報委員会

編集/柴田 文明（編集長 理学部）
福島 昇（編集事務 企画広報室）
問い合わせ先/お茶の水女子大学企画広報室 〒112-8610 東京都文京区大塚2-1-1
TEL 03-5978-5105 FAX 03-5978-5890
E-mail info@cc.ocha.ac.jp URL http://www.ocha.ac.jp/

印刷 昭和堂